

# インド洋に浮かぶ 南国のスリランカ



筆者（左）と友人

## 安永 健太 (やすなが けんた)

前・在スリランカ日本国大使館書記官  
国土交通省北海道開発局函館開発建設部函館道路事務所  
第2工務課事業専門官

2003年 国土交通省北海道開発局入局。2018年3月～2021年3月まで、在スリランカ日本国大使館の書記官として、政府開発援助（ODA）案件に関する企画立案、当地に進出する日本企業のサポートなどを担当。2022年4月より現職。

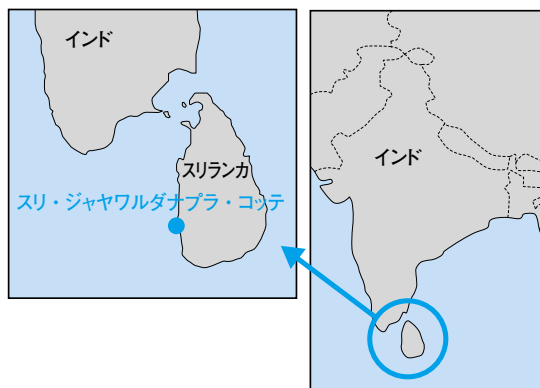
## はじめに

かつて「セイロン島」と呼ばれていた南国の島嶼<sup>とうしょ</sup>、南アジアの大国インドから南方に29km隔てたインド洋に浮かぶその国の正式名は「スリランカ民主社会主義共和国」といいます。「民主社会主義」とは社会主義と民主主義の両方を支持する考え方で、資本主義を改良して社会主義を実現しようとする政治思想だそうです。長く続いた内戦が2009年に終結して以降、国内の社会・経済の復興に力が注がれ、中国、インド、日本など様々な国からの支援を受けながら、高い経済成長を実現しました。しかしながら、近年スリランカは、莫大な対外債務を抱え、外貨調達のためIMF（国際通貨基金）や世界銀行等へ支援を要請しながらも、今年2022年5月に実質的な債務不履行（デフォルト）に陥る等、危機的な状況にあります。

筆者は、国土交通省北海道開発局から出向し、2018年3月から2021年3月までの3年間、在スリランカ日本国大使館に勤務しました。担当業務は、主にスリランカ国内のインフラ整備支援等にかかる開発協力、政府資金援助（ODA）に関連するものでした。在任中、2019年4月には連続爆破テロ、2020年3月以降の新型コロナウイルス感染症拡大など大変な出来事もありましたが、そのような状況下でも様々な貴重な経験ができました。今回は、筆者の経験や現在の情勢等を交えながら「スリランカ」を少し御紹介したいと思います。

## スリランカの概況

スリランカの首都「スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ（Sri Jayawardenepura Kotte）」（「スリ（聖なる）・ジャヤワルダナ（勝利をもたらす）（※遷都を決めた第2代大統領の名前）・プラ（都市）・コッテ（：元々の街の名前）」）は1985年に旧首都コロンボから遷都され、国会議事堂や公官庁などの行政機関が移されましたが、コッテから西方10kmほどの位置にある旧首都コロンボの方が大都市として経済発展しています。大統領府や首相官邸、財務省、港湾・海運省など主要な



スリランカの位置図（外務省ホームページ）

省庁はコロombo市内に残存しており、首都機能が二分化しているような状況です。日本を含めた各国大使館もコロombo市内にあります。



コロombo市内の街並み

島嶼国であるスリランカは、北海道の約0.8倍の国土を有し、約2,100万人の国民が生活しています。民族は大別してシンハラ人、タミル人、ムーア人の三民族で、宗教は仏教徒が7割と多数派で、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラム教の多宗教が共存しています。様々な式典やイベントでは（日本の支援事業における供用式典等でも）4宗教の司祭が招待され、それぞれが祈禱するという慣習があり、信心深い国民性といえます。スリランカの北部や東部は、ヒンドゥー教を信仰するタミル人が多く住んでいて、英語やシンハラ語がほとんど使われず、タミル語しか通じない地域があります。出張の際、同伴する大使館の現地職員のシンハラ人は、北部等のそれらの地域に行くのは「怖い」と言っていました。身の危険を感じるほど、民族間の遺恨は内戦終結から10数年経った現在でも未だ消えていないように感じます。筆者の在任中にも、何度か民族間の小競り合いが起きていました。



アヌラダブラ仏教遺跡

スリランカは、16世紀頃から英国、オランダ、ヨーロッパ諸国による植民地支配が3世紀以上にわたって続いた後、英国連邦内自治国「セイロン」として独立したのは1948年のことです。植民地支配からの独立以降は、多数派である仏教徒のシンハラ人中心の政権によって、ヒンドゥー教を信奉するタミル人に対する不遇が続きます。これに反発したタミル人の一部が、1975年に反政府過激派組織「タミル・イーラン解放の虎（Liberation Tigers of Tamil Eelam/LTTE）」を結成し、武力闘争を起こします。この内戦は、1983年に北部州のジャフナで地雷による初めてのゲリラ攻撃が行われたことをきっかけに激化し、20年以上にわたって国や人々を疲弊させました。世界各国が様々な

介入を行いながらも、政府がLTTEを武力制圧することで、内戦は2009年に終結しました。内戦終結以降は、治安が安定し、現在ではLTTEの支配領域であった北部や東部への移動が可能となっています。この平和構築に関して、日本は、2002年に明石康元国連事務次長をスリランカの平和構築並びに復旧及び復興に関する日本政府代表に任命してスリランカ和平に積極的に関与し、2009年5月の終結後も野口元郎国際司法協力担当大使を現地派遣する等、後押ししてきました。

### スリランカの生活

南国のスリランカには四季はなく、年に二度の雨期と乾期が東西で交互に繰返して訪れます。気温は年平均30℃前後ありますが、スリランカ南中部の高山地帯では10~20℃まで気温が下がります。国内の至る所で、南国特有の深緑の森林や大規模な農園を目にすることができます。農園ではココナッツやカシューナッツ、バナナやパパイヤなどの南国の果物が栽培され、スリランカ南中部（ヌワラエリヤ等）の高原地帯で栽培されている紅茶（茶葉）は重要な輸出品の1つとなっています。日本で市販される紅茶の多くで、スリランカ産茶葉が使われています。スリランカを取り囲むインド洋の新鮮な海産物や美しいビーチは貴重な観光資源となっており、特に南部や東部のビーチはサーフィンを楽しむ外国人観光客で大変賑わっています。さらに、大自然が楽しめるサファリパークや紀元前3世紀以降に繁栄した仏教遺跡等8つの世界遺産、多くの観光スポットがあります。



ヌワラエリヤの茶畑



アルガンベイのビーチ

スリランカの道路交通は異様に混雑しています。日本と同様に左側通行なので運転時の違和感はないのですが、四方八方喧しく鳴り響くクラクションの中、先を争うように自動車やトゥクトゥク（三輪自動車タクシー）・路線バスが走行し、その隙間を縦横無尽にバイクや自転車・歩行者が動き回る、その喧噪には驚か



コロombo市内の道路状況

されます。朝夕の通勤の時間帯は特に混雑が激しいため、警官が信号機を止めて手動で交通整理しています。

また、スリランカ国内を走る自動車は、日本の中古車が多いことが印象的です。

コロombo市内の街並みは、新しいホテルやマンション・ビル、ショッピングモール等の建設ラッシュが続く一方で、古い建物も数多く残っています。近年は、南西部から東部にいたる海岸線の地方都市でも外国人観光客向けのホテルの建設が始まっています。

スリランカの国民性としては、少々プライドの高いところがありますが、とても「親日的」という印象を受けます。日本と同じ島国であることや仏教国であること等の共通点の他、内戦中の日本の経済支援、明石康日本政府代表らによるスリランカ和平への積極的関与に広く好感がもたれていることが理由にあります。

また、1990年代以降、日本のドラマ「おしん」が何度も繰返し放送され、劇中の昔の日本と同様に、都市から離れた地域や農村で苦学した多くの人々から共感が得られ、毎回高視聴率を記録しているそうです。

スリランカの食文化について、民族や宗教等に関わらず、一般的な食事はカレーです。スリランカカレーは基本的に一つの食材に様々なスパイス等を用いて作られます。チキンカレー、フィッシュカレー、豆カレー、様々なカレーをスリランカ米のライスに盛り付け、それらを混ぜ合わせながら手で食べます。スリランカ料理は基本的に辛いです。外国人観光客向けのホテルやレストランでは、少し値段は高くなりますが、清潔で辛くない料理を提供してくれます。このほかにも、コロombo市内であればファストフード店もあり、和食やイタリアン、インドカレー、中華料理、タイ料理、韓国料理、ベトナム料理など選択肢は多岐にわたります。

また、パイナップル、パパイヤ、マンゴー、バナナ、ランブータン、マンゴスチン、ジャックフルーツなど様々な南国フルーツをスーパーマーケットや生鮮市場、地方の道路脇で見かけるワゴン販売などで身近に格安に購入でき、それらを一年中堪能することができます。

ホテルビュッフェには、スリランカカレーとフルーツのコーナーが必ずあるので、短期の観光でも十分に楽しむことができます。



スリランカカレー

## スリランカの経済・政治

内戦が終結して以降、スリランカ経済は復興景気を背景に急成長しました（2018年 名目GDPは879億米ドル）。特に、東アジアと中東を結ぶ海上交通（シーレーン）の要衝に位置するスリランカの地政学上の重要性から、年々コンテナ取扱貨物量の増加が続く国際港湾のコロンボ港をはじめ、港湾開発の動向に注目が集まっています。



コロンボ港



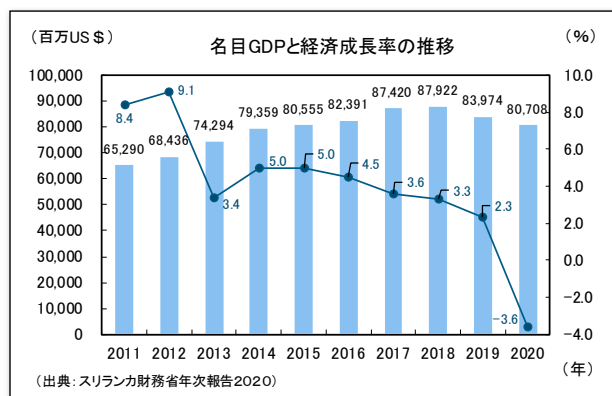
ケラニ河新橋建設事業

また、衣料品や紅茶（茶葉）、ゴムなどの輸出品がスリランカ経済を支えている一方で、近年は観光業の発展がめざましく、国内8つの世界遺産、ビーチ、サファリ等の豊富な観光資源が新たな収入源となっており、次々とリゾートホテルや長期滞在型ホテル等が建設されています。コロombo市内でも中国やインド、米国、日本などの海外資本による大型ホテルの建設ラッシュが続き、都市部の景観が日々変化していく様を見ることができます。



キャンディ市下水道整備事業

しかし、これまでプラスだった経済成長率が、2020年には初めてマイナスとなりました（2020年 実質GDP成長率は-3.6%）。2019年4月に多くの市民と外国人が犠牲となった連続爆破テロ事件が発生したことや、2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大等を起因として、観光業への影響は甚大だったようです（国際収支のうちサービス収支：2018





年 37.7億米ドル、2019年 28.5億米ドル、2020年8.1億米ドル)。返済期限を迎えた多額の対外債務の問題も抱えて、スリランカは財政と経済の両面で窮地に立たされています。

スリランカの政治についてですが、筆者の在任中に政権交代がありました。2019年11月には5年の大統領任期満了に伴う大統領選挙が実施され、開票の結果、同年4月に発生した連続爆破テロ事件後の安全保障の立て直しを優先課題に挙げたゴタバヤ・ラージャパクサ候補が52.25%の票を得て大勝し、新大統領に就任しました。さらに、2020年8月には総選挙が実施され、ゴタバヤ新大統領の実兄であり、2014年まで大統領を歴任した親中派のマヒンダ・ラージャパクサ新首相が就任し、安定政権の誕生により景気・経済の早期回復が期待されました。

しかし、2022年4月以降、深刻な財政危機と外貨不足に伴う物価上昇、生活必需品や燃料不足など経済悪化が顕著となり、政府に対する不満を募らせたコロombo市民が抗議デモを行い、暴徒化する事態が発生しました。政府への不満は国内全土に広がり、今尚、政治経済の混迷と治安悪化への懸念が続いている状況です。

日本とスリランカの関係  
を述べる上で、必ず紹介される  
有名なエピソードがあります。  
第二次世界大戦終結のため、  
1951年に開催されたサン  
フランシスコ講和会議におい



故ジャヤワルダナ元大統領

て、セイロン代表（当時財務大臣）として出席した故ジャヤワルダナ元大統領は、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、愛によって止む (hatred ceases not by hatred but by love)」という仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求権の放棄を明らかにするとともに、日本を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行いました。当時、戦勝国の間では日本を分割統治する方針が議論される等、日本に対する厳しい制裁措置が求められていたところであり、同元大統領の演説はそういった国際世論の流れを大きく変えたとも言われ、日本の国際社会復帰へと繋がる象徴的な出来事の一つとして記憶されています。

サンフランシスコ平和条約の締結によって、日本の主権回復が認められ、1952年の条約発効を機に日本とスリランカは国交を樹立、今年2022年に国交樹立70周

年を迎えます。戦後の復興を成し遂げた日本は、1965年にスリランカとの間で500万米ドルの円借款（有償支援事業）を締結したことを皮切りに、現在も援助供与国の一つとしてODAによる支援を続けており、今後も様々な方法でスリランカを支援していくことでしょう。

## おわりに

スリランカ着任直後は、初めての異国生活、初めての海外勤務で戸惑うことがたくさんありましたが、大使館の同僚や現地職員、スリランカ政府職員のカウンターパートや友人に恵まれ、たくさんの方々に支えられて3年間を無事に過ごすことができました。当然のことながら、日本とは違う文化・価値観から嫌な思いをすることもありましたが、それでも、こうしてスリランカの魅力を紹介できるほど、筆者はこのスリランカでたくさんの素晴らしい経験ができたと感じています。自分の運転で世界遺産等の観光スポットを巡る一人旅をしたこと、本場スリランカカレーや初見の南国フルーツを堪能できたこと、幅広い見識のある在留邦人や現地スリランカ人の方々と交流できたこと、日本からの政府要人の随行やODAサイトの視察等でいろいろな地域を訪れたこと、複数のODA案件について担当省庁の各カウンターパートと何度も議論をしたこと、大使に随行して大統領や首相・閣僚大臣等との会談や大使公邸での会食に同席したこと、インドやアメリカなど他国大使館員と交流できたこと、2019年4月の爆破テロ事件発生時には在留邦人等の安否確認のために病院や警察・遺体安置所を訪ね回ったこと、テロ事件やコロナ禍のロックダウン時にODA事業や在留日本企業のフォローアップのため関係省庁と多様な事案を協議したこと等々、語り尽くせないほどに、公私共に本当に貴重な体験ができました。そのためなのか、帰朝した今でもスリランカ情勢をつい気にしてしまいます。最近のスリランカでは国内に混乱が生じていますが、平和的な問題解決と新たな経済復興が達成された際には、読者の皆様も素晴らしい体験を求め、“インド洋の真珠”と呼ばれる南国の島嶼スリランカを是非訪ねてみてください。



シーギリア・ロック



ダンブッラ岩窟寺院